

〈語り〉からの出発

環境の三つの水準（ミクロ・メゾ・マクロ）は、三種の風景経験を表す。三つの水準を結ぶ第一歩は、個の〈語り〉にある。自己の〈語り〉から、いかに他者との語り合いが生まれ、〈対話〉へと展開するか——実践の過程をあとづける。

I 風景の観点から

○三つの風景経験——基本風景・原風景・表現的風景

- (1) 基本風景——沈黙のうちに生きられる前言語的風景＝ミクロ・レベル。
- (2) 原風景——共同の言語行為（語り合い）によって成立する集合的風景＝メゾ・レベル。
- (3) 表現的風景——個人の自覚から生まれる風景の表現。「表現」は、二つの方向性¹をもつ（→マクロ・レベル）。

風土的実践は、〈語り〉から〈対話〉を生み出し、三種の風景が一体化する〈構造〉（別図参照）を完成させることにある。

II 物語と対話

○物語の成立

〈出会いの場〉において、個々の語りが共有され、〈物語〉が成立する。物語によって、(1)基本風景（ミクロ・レベル）は、(2)原風景（メゾ・レベル）の水準に上昇する。

→Q. 〈何を、なぜ、いかに語るのか？〉

○対話の展開

〈語る ⇄ 聴く〉物語の場において、〈対話〉が展開する。対話から成立する(3)表現的風景。それは、場の内部に向けて(2)原風景の意味を明らかにする一方、個の創意による個性的な風景の表現を外部の社会に伝え、広げていく役割をもつ。マクロな間風土的世界が、ここから開かれてくる。

¹「表現」は、①おのれの原風景の自覚、②新しい風景の創出、という異なる二面を表現する。①は内向き、②は外向きの方向性をもつ。②は、間風土的主体としての実践（対話）に向けてはずみとなる。

[概要]

I 風景の観点から

前回、風土学的実践の意義が〈縁結び〉にあることを論じた。その趣旨を、今回は私が最初に手がけた風景論の観点に立って、「〈語り〉からの出発」としてとらえなおすことを試みる。『風景の論理』は、人間の世界とのかかわり方——世界の見方、意味——を「風景」というキーワードで表したまで、世にいう風景論の類ではない。世界とのかかわり方を(1)前言語的・匿名的水準、(2)言語的・集団的水準、(3)自覚的・个性的水準、という三段階に分け、「基本風景」「原風景」「表現的風景」と名づけた。(1)はミクロ、(2)はメゾ、(3)はマクロ、の各水準における実践を表す。

しかし、本書の理論的な細部に立ち入ることはしない。講話の狙いは、「対話の会」での実践が、〈語る〉ことから始まることを理解し、なぜ何のために語るのかを考えたいうえで、対話に臨むきっかけとすること。つまり、〈物語から対話へ〉の道筋を開き、全員がそれに参加できる用意を整えることである。後半の「哲学対話」では、当方が用意したこのプログラムに沿った事例報告が行われる。

II 物語と対話

では人は、何を、なぜ、いかに語るのか？人は自分がしたこと、考え感じたことを、他の人に向けて語る。なぜ、何のために？人の本性は、他人に向かって物語ること、それによって物語を他と共有することにある——人は「語る(＝ロゴスをもつ)動物」(アリストテレス『詩学』)。物語(story)＝歴史(history)の成立。われわれの会は、たがいに知らない人と人が、出会って語り合う〈場〉として開かれている。そこで語られることどもは、語る当人の問題であるとともに、それを他人事とせずに関与する人々の存在によって、共同の物語となる。「対話の会」の存在意義、それは共同の物語を紡ぎ出すための集いであること。

物語が共同であるためには、場に居合わせる各自が、物語の制作に参加しなければならない。語りを聴く側が、こんどは語る側に転じる、という〈語る－聴く－語る〉の連鎖によって、〈語り合い〉が生まれ、共同制作の物語へと進展する。相互的な言語行為であるがゆえに、「独り語り」(モノローグ)ではなく、「対話」(ダイアログ)が展開する。

◎「木岡哲学対話の会」の案内——「表現的風景」の一例

メゾ・レベルに位置する本会の性格を紹介する、「制作に生成 AI を利用」した表現的風景の一例。AI は表現のためのツールではあるが、表現主体ではない。表現として、①参加者にとって、本会の存在意義や目的を表す「原風景」たりえているかどうか、②外部に向けて本会の存在をアピールするのに役立つ作品かどうか。この二点について、検証を行いたい。二点がクリアされるようなら、AI の利用価値を承認してもよい、と考えられるか？